

死んではい

# 死んではい

らうか

## この国はどこへ行こうとしているのか

死んだと聞かれて三日目に蘇った若い男は、白髪のお人になって驚いた。俺は地獄を見たのだと、そして誰にも分からない言葉で語り始めた。

「歌占」

非の打ち所のない人生。01年5月2日までの多田富雄さんの人生はそれだった。若くして免疫学で世界的な業績を上げ、東大教授に。世界を駆け回った。大敵を打ち、脳死や相対性理論を主題に能く書いた。だがその日、脳梗塞で倒れ、半身不随になった。歩くことも、語ることも、水を飲むことも、もうできなくなった。詩の中の白髪のお人は、多田さんだ。一時は死を望んだ。

機を散らす雨が上がった午後、東京都文京区で自宅を訪ねた。いかめしい苦学を想像して、拍子抜けした。さまざまな赤色の糸で編まれたセーターを捨て、車椅子に座っては



## 免疫学者 74歳 多田富雄さん

# 今の政治は病んでいる

にかむように笑っていた。でも言葉は鋭い。政府が「長寿」と言い換えた後期高齢者医療制度について聞くに、キーを打つと音になる。「トーキングマシン」で、「ワASTE」(焼捨て)で「デス」(死)。あまりに率直な表現に「ふ」と喚き出すと一緒に笑い、そして静かだ。「これは人間の国の政治じゃない。私には、この国自身が病んでいるように見えます」。話を7年前に戻そう。倒れて2カ月、車椅子で海に沈む夕日を思い出した時、突然ひらめいた。「脳の神経細胞が死んだら再生することなんかありえない。

(略)もし機能が回復するとして、元通りに神経が再生したからではない。それは新たに作り出されるものだ。(略)私が一歩を踏み出すとしたら、それは失われた私の足を借りて、何者かが歩き始めるのだ。(略)熱心な三人(人)集英社より。その何者かが多田さんは巨入と呼び、彼と会いた。リハビリに励んだ。歌占は、そのころ書いた。50打も振るようになった。

だが06年4月、再び打ちのめされる。小泉純一郎内閣の下で診療報酬が改定され、リハビリの保険給付が最大180日で打ち切りになった。それ以上続けても医学的に改善の見込みはない、という理由だ。「リハビリは、病氣から回復するための医学です。それを



## 後期高齢者医療制度は姥捨てです 反乱起こしたいぐらい

制するものは、治るのをやめろ」と言うのと同じ。トーキングマシンを通して、壁を穿ち、なだりが伝わってくる。多田さんは開いた。左手でパソコンをたたき「リハビリ中止は死の宣告」と新聞に投稿した。リハビリをやめたら、歩けなくなる。病状が後戻りし悪化してしまう。投書は署名運動に発展し、44万件も集まった。車椅子で厚生労働省に届けた。でも制度はほとんど変わっていない。そして今度は後期高齢者医療制度だ。75歳以上を対象で、全体の医療費が増える。高齢者が支払う保険料も上がる。つまり高

「高齢者や障害者は早く死ぬというならナチスと同じ。国は国民が自ら国民皆保険を捨てるのも損である。」「聞き直したのはトーキングマシンの声が大きかったからではない。誰いたのだ。」「このころ、何故でも加入できる医療保険の宣伝が目立つでしょう。」「小泉政権発足は04年4月。7月には保険業の規制が緩和され、医療保険やがん保険が急速に増え、

「高年齢者や障害者は早く死ぬというならナチスと同じ。国は国民が自ら国民皆保険を捨てるのも損である。」「聞き直したのはトーキングマシンの声が大きかったからではない。誰いたのだ。」「このころ、何故でも加入できる医療保険の宣伝が目立つでしょう。」「小泉政権発足は04年4月。7月には保険業の規制が緩和され、医療保険やがん保険が急速に増え、

「夕刊特集ワイド」へご意見、ご感想を t.yukan@mbx.mainichi.co.jp ファクス03-3212-0279